りびんぐらいぶず　平成 24（2012）年7月第1号

永代経ご法話「真実五願」

◆ご讃題

１．「（第十八願）たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信楽して、わが国に生ぜんと欲（おも）ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」（Ref『仏説無量寿経』「真実五願」註釈版聖典 P18）

２．「本願の名号は正定の業なり。至心信楽の願（第十八願）を因とす。等覚を成り大涅槃を証することは、必死滅度の願(第十一願)成就なり。如来、世に興出したまふゆゑは、ただ弥陀の本願海を説かんとなり」（Ref『教行証文類』「行文類」註釈版聖典 P203）

◆はじめに

去る六月十六日は、五年ぶりで、福田正朗師を永代経法要のお客僧としてお迎え致しました。師は、嘗て若き日にお導きに遇われた瓜生津隆雄（うりうづりゅうお）和上から賜ったとのご案内で、真実五願のお心を「お正信偈」の御文を引きながらお話戴きました。今回は、当日のご法話の耳の底に残るところを引いてご一緒にみ教えをお聴聞させて戴きたいと存じます。

◆真実五願（しんじつごがん）

仏説無量寿経（大教）は、自分では悟りを開くことのできない者の為にお釈迦様によって説かれました。**「如来（＝お釈迦様）が、世に興出したまふゆゑは、ただ弥陀の本願海を説かんとなり」**とはそのことを申します。大経には悟りを開くことができないどころか、地獄必定の衆生（私）のために、阿弥陀如来のご本願（四十八願）のみ教えがお説き下さってあるのです。

その中心になるのが第十八願です。

第十八願は、法蔵菩薩としてご本願をお建て遊ばし、五劫の間修行をし、やがてお悟りを開いて阿弥陀如来となられ、南無阿弥陀仏のお名号が完成されました。

お名号には阿弥陀如来（お浄土）のお徳のすべてが漏れなく込められていますから、その名号をお聞かせに与って衆生（私）は悟りを開いていく（往相）のです。

これが浄土真宗のみ教えであります。

第十八願は、開けば**真実五願**よりなる。

まずその第一が第十一願です。**必死滅度の願（ひっしめつどのがん）**と言われます。

「お正信偈」に「**成等覚証大涅槃（等覚を成り大涅槃を証することは、必死滅度の願（第十一願）成就なり**」と謳われています。

「等覚」とは、如来と等しい身、必ず仏となる身（正定聚）として下さることが誓われた願であります。

浄土真宗は、如来様のお徳の全てが込められてたお名号を頂戴することによって、お悟りが約束された身となるのです。

今生で如来様の真のお心（その本体はお名号）を戴いた瞬間に必ずや浄土に生れ仏になる身にさせて戴くと決まるのです。

だから、これを**現生正定聚**（げんしょうしょうじょうじゅ）と申します。この現し身のままで往生すれば必ずやお悟りを開くお仲間に加えて戴けるからです。

既にご本願が叶って、法蔵菩薩は、阿弥陀如来となられ、**必死滅度の願**が成就されているからです。

阿弥陀如来は、第十八願に於いて「わが名を称えよ（＝乃至十念）と仰せ下さっています。だから、仰せに疑いを差し挟まず、仰せの通りにお称えすれば（＝疑の蓋を雑（まじ）えなければ）、如来様のまことのお心を頂戴することができるのです。

如来様の仰せにお任せするというのは、お念仏の称えぶりを表す第十八願の「至心信楽欲生」（中心は信楽（＝疑いをさしはさまない）のお心であります。

如来様から賜る（＝これを**本願力廻向**という）の仰せに対して疑いを差し挟まなければ（仰せの通りに称えれば）、如来様のまことのお心（本体はお名号）が一息に衆生の胸底に流れ込んで下さることになるのです。

このようにして如来様のまことのお心を賜ることを信心を戴いたと称するのです。

だから、浄土真宗の信心には、仰せに対して疑いの心を差し挟まないという姿（**相**）と、その結果、まことのお心を賜るという実体（**体**）とがあることが知られます。

では、信心を戴いたらどういう状態になるのか、その心持を譬えますと、丁度入学試験に合格したときに喩えられます。

まだ入学していないから学生ではないが、そのときがくれば間違いなく学生になることが約束されているからです。

その第二が第十二願です。**光明無量の願**（こうみょうむりょうのがん）と言われます。

「**光明**」とは、如来様の智慧を表します。

その第三が第十二願です。**寿命無量の願**（じゅみょうむりょうのがん）と言われます。

「**寿命**」とは、如来様の慈悲を表します。

ここまでは、如来様のお話だから衆生にはなかなか分るものではありません。よく伺えば理屈位は頂戴できるというものです。

その第四が第十七願です。**諸仏称名の願**（しょぶつしょうみょうのがん）と言われます。

お名号「南無阿弥陀仏」が完成されたことを示す願です。諸仏は、そのことを衆生に伝

えようとして居て下さるのです。

諸仏のお一人が釈尊（お釈迦様）です。われらが人間世界では、お釈迦様がお名号のお謂れをるる説き明かして讃嘆（広讃）して下さったのです。大経がそれです。

「お正信偈」には**本願名号正定業（ほんがんみょうしょうじょうごう）**と謳われています。

なぜ、**本願名号正定業**というのか、本願の名号をお聞かせに与ること（聞名）によって、衆生（私）は、間違いなく佛に成る（お悟りを開く）身と定まるからです。

第十七願には、**咨嗟称我名（ししゃしょうがみょう）**とあります。「**咨嗟**」とは、讃嘆（ほめ讃えること）です。「**称**」とは、称揚の意で諸仏がお名号のお徳の素晴らしさをお讃え下さっていることをいいます。

なぜ諸仏が誉め讃えて下さることに意味があるのか。

喩えて云えば店の主人が自分の店（品物）は評判がよいと言っても今一つであるが、店を利用するお客さん達が「あの店（品物）はよい」とほめると行き届くからである。

諸仏如来が無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃嘆なさるそのお名号（の謂れ）をお聞かせに与って、衆生（私）は、阿弥陀如来のお慈悲に遇わせて戴きお悟りを開くことができます。

これは、第十一願、第十七願と第十八願が一連に成就された旨がお釈迦様によって明らかにされた大経下巻のお心です。

親鸞聖人は、**南無阿弥陀仏をとなふるは佛をほめたてまつるになるとなり**と仰せ下さってあります（『尊号真像銘文』註釈版 P655）。

阿弥陀如来より回向された南無阿弥陀仏と称える口業は、如来様の大行が衆生（私）の上で行ぜられる姿ですから、それはそのまま諸仏の名号讃嘆に他ならないということが知られるのであります。

南無阿弥陀仏と称えましょう。すると聞こえて下さるものがある筈です。南無阿弥陀仏と聞こえて下さったのです。聞こえて下さった南無阿弥陀仏は、たった今し方お浄土を発して直ちにわが両の耳を揺るがせ、わが胸底に届いて下さった如来様のお喚び声に他ありません。聞こえて下さり、届いて下さったものこそは、如来様が現れて下さったお姿であり、その瞬間、衆生は如来様の懐に抱かれていることがわかるようになるのであります。

合掌

◆正覚寺仏壮例会　毎月第一日曜日午後八時より

毎月、御法話会（お聴聞の会）を営んでおります。京都から駆けつけて下さる布教使様のご法話を頂戴します。どなたさまもご縁にお遇い下さいますようご案内申し上げます。

◆正覚寺仏教婦人会例会　毎月十六日午後七時半より

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）　〒520-0501 大津市北小松四五二番地 、
電話 077-596-0166、Fax077-596-0196 住職　堅田 玄宥